

JACET 関西支部 2004 年度秋季大会 ワークショップ・研究発表・実践報告・シンポジウム要旨

ワークショップ1 「外国語としての英語の読みと眼球運動:EMR8を使った計測の意義と実際」

発表者: 門田修平(関西学院大)

鈴木裕子(大阪樟蔭女子大・非)

釣井千恵(桃山学院大・非)

山科美和子(桃山学院大・非)

本ワークショップは、外国語として英語を学ぶ日本人英語学習者が、パソコンディスプレイに視覚提示された英文の読解に際して、どのような眼球運動の実態を呈するかに関してデータ計測をする意義とそのノウハウについて考察し、一定の手順を報告しようとするものである。

まず、鈴木裕子氏による「読みにおける眼球運動の一般的特性」では、読解中の眼球の基礎的運動として、サックード、停留、逆行、行かえなどについて紹介し、その上で英語および日本語の読みにおける眼球運動について先行研究の成果を概観し、文字表記体系の違いをはじめとして、いろいろの要因による影響について検討し、読解における眼球運動計測の必要性・意義について考察する。

次に釣井氏は、「アイマクレコーダ EMR-8 (ナック社製)を用いた眼球運動データの計測」と題し、瞳孔/角膜反射方式を採用した眼球運動計測装置であるアイマクレコーダ EMR-8(ナック社製)を用いた読みの眼球運動データの計測方法や手順について、写真・映像などを交えながら報告する。同時に、実際に実験・計測を行ってみて明らかになった問題点や、実験終了後に行った被験者へのアンケート回答に見られた問題点なども議論する予定である。

最後に、山科氏による「データ集計方法:EMR8 解析ソフトを使って」では、実験中に録画した動画データと EMR8 眼球運動データをもとに、一文単位でいかにデータ集計を行うかそのノウハウについて議論する。まず簡単に EMR8 解析ソフトを概観し、その上で実験用英文の読解における停留時間、停留回数、逆戻り回数、移動速度などを読み取る手法やデータ一覧の見方などについて検討する。

なお、本ワークショップは、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)『日本人英語学習者によるガーデンパス文の処理メカニズム:眼球運動データに基づく検討』(課題番号 16520366)の成果の一部を成すものである。

ワークショップ2 「クラス・マネージメントを比較する ESPからの発想」

司会: 椋平 淳(大阪工業大)

発表者: 新田香織(近畿大)

井村 誠(大阪工業大)

岩井千春(大阪大・院)

大学審議会答申(平成10年)がFDの必要性を声高に叫んで以来、教育の根幹である授業内容・運営方法の改善に対して、各大学や学会は多大な労力を割いている。例えば JACET においても、従来からの授業実践報告などに加えて、今年度から「授業学研究委員会」を設置したりしている。

ここ数年、大学英语教育界において“ESP”という概念が急速に市民権を得てきたことは、授業改善に対するこのような機運の高まりと無縁ではない。なぜなら、“ESP アプローチ”とは、単に「専門分野に関連する素材を扱う教授法」なのではなく、「いかに授業を運営するか」という観点を本質的に内包する教育手法だからである。

しかしながら現状では、“ESP”に対する多くの英語教員の理解は、とすると実際にこのアプローチを取り入れている教員も含めて、残念ながら「専門分野のコンテンツ」というレベルに止まっているように思われる。確かに、“authentic materials”の使用は ESP 授業の基本だが、単にそれを用いるだけでは、社会や学生のニーズに答えた効果的で活発な授業運営が実現できるとは限らない。

そこでこのワークショップでは、会場の聴衆を「学生」に見立てながら、3人の発表者が「教師」役となって、各自の手法にそった ESP 的模擬授業を展開する。“Authentic”な素材使用は共通するものの、それぞれの授業運営方法の違いにより、「学生」側の受け取る印象や教育効果はどのように異なるだろうか。

こうした比較から顕になる授業運営上のさまざまなテクニックは、おそらく“ESP 授業”のみに有効なわけではなく、他の多くのアプローチに際しても応用可能であると思われる。今後の授業改善に向けて、ESP 的な発想から生まれる授業運営のノウハウを、「学生」である聴衆の意見を交えながら、参加者全体で共有できるよう議論を進めたい。

研究発表1 - 1 企業が求める英語とは

深山晶子(大阪工業大)

文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」が公表され、その中で、大学の「英語力の達成目標」として、「各大学が、仕事で英語が使える人材育成の観点から目標を設定する」と謳われている。大学において企業活動を意識した英語教育を行うようにとの要請である。当の企業現場では、かねてより、ビジネス英語力を検定する TOEIC テストが重用され、TOEIC スコアを昇進・昇格に利用する企業も増えてきている。AERA(2002)年の調査結果によると、調査された 175 社中、現在スコアを昇進・昇格に利用している企業と、将来導入を計画している企業を合わせると、過半数を超えている。この現状を踏まえ、TOEIC テスト向けの授業を取り入れている大学も少なくない。では、実際、企業が大学に求めている英語教育とは、TOEIC テストのスコアを上げることにつながる教育なのであろうか。

本研究では、「企業における英語研修に関するアンケート」と題する質問票を作成し、企業現場での英語研修への取り組みの実態、および大学英語に対する企業からの要望について調査を行い、企業の求めている英語力がどういったものかを明確にした上で、大学英語教育のあり方について考察した。調査対象は、全国の企業から無作為に選択した 219 社で、それらの企業にアンケートを送付し、回答が回収できた 69 社の回答内容を分析した。その結果、以前は、社内英語研修内容が、ビジネス英会話等に象徴される、もっぱら TOEIC テストに焦点をあてたものが多かったが、最近では、「Eメールの英語」や「契約の英語」のように「明確な目標設定・即効・自立学習」タイプの研修に変化しつつあることが分かった。これらのポイントこそ、大学英語教育現場で急速に導入が始まっている ESP 教育の要である。本発表では、TOEIC テストのみを意識するのではなく、企業現場のニーズに即応した大学における ESP 教育の可能性について焦点をあて、論ずる。

参考文献: AERA(2002) 「会社の英語」(臨時増刊号・7月)朝日新聞社刊

研究発表1 - 2 Paradigm Shifts in the Language Education

Policy Formation Process: Toward Theory Development

Robert J. Fouser (Kyoto Univ.)

In his *The Structure of Scientific Revolutions*, Thomas Kuhn (1962)

argued that progress in science occurs through sudden paradigm shifts that emerge from a slow and steady erosion of empirical support for the dominant paradigm in research. Kuhn's theory of paradigm shifts has since been used to explain paradigm shifts in a broad range of human endeavor.

As a form of human endeavor, language education policy is also subject to paradigm shifts that affect society as a whole. Changes in social needs and political leadership, for example, often cause paradigm shifts, some (though not all) of which affect language education policy. In this paper, I will consider the role of paradigm shifts in language education policy with the following research questions in mind:

- 1) What forms do paradigm shifts take?
- 2) What causes paradigm shifts?
- 3) How does policy planning interact with paradigm shifts?
- 4) How do paradigm shifts affect various components of language education policy?
- 5) How does resistance to paradigm shifts manifest itself?

In this paper, "languages" refer to all languages (native, foreign, second, third, heritage, intranational, classical, etc.) taught in schools, and "language education policy" refers to official (national and local) policy on the teaching of languages in schools.

To explore the role of paradigm shifts in the formation of language education policy, I will draw on historical and current examples of paradigm shifts in a number of different educational contexts (Australia, Hong Kong, Ireland, South Korea, United States, and Vietnam, etc.). In conducting the analysis, I will refer to primary sources (official documents and statistics) and secondary sources (news reports and research papers). Based on the analysis, I will develop answers, however speculative, to the research questions posed in this paper, and based on those answers, I will posit a theory of paradigm shifts in language education policy that will help explain the qualitative differences in paradigm shifts and the reactions to them. I will conclude the paper offering a hypothesis on the future direction of language education policy in Japan.
Reference: Kuhn, Thomas S. (1962). *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.

研究発表1 - 3 Foreign Language Teaching and 'Communities of Practice'

Okada, Yusuke (Graduate School, Ritsumeikan Univ.)

The notion of 'Communities of practice (COP)', invented by Lave and Wenger (Lave & Wenger, 1991), has been widely accepted in a variety of fields including Language Education field because it changed the view of learning from the transmission of knowledge into the brain to a process of a participation to COP. This idea of learning shed a light on aspects of language learning which had been neglected by the traditional idea of it.

The purpose of the presentation is the following 3 statements:

1. Telling how the notion of COP has been accepted in language education field.
2. Pointing out problems of researches or practices of COP in Foreign language teaching.
3. Suggesting a Communities of Practice which facilitates indirect language learning, not direct language learning.

The analysis of over 50 articles and books shows that the notion of Communities of Practice has been applied mainly as the following 2 approaches in language education field:

1. An analytical perspective which examines how languages are learned in existing COP.
2. An educational method that facilitates learners' linguistic competence by having them participate in a teacher-made community of practice.

The first approach can be taken when language learning is considered as a subcomponent to be a full practitioner in a community of practice.

The second approach can also be divided into 2 types: one is that having learners participate in an existing Community of Practice in order to close a gap between what learners learn in a classroom and what they encounter in everyday life in Second Language (SL) context, and another, in Foreign Language (FL) context, is that making virtual SL environment as COP on the Net and have learners use a target language as a participation to the COP.

The problem of the second approach, especially in FL context, is that there is little practice which shows how learners' linguistic competence is enhanced because of a participation to COP. The reason for the problem is because the focus was on making learners use a target language, and other important features to design COP, such as 'Domain' and 'Practice', were not considered enough. The fact of the COP in the past practices was 'Constellations of Practice', not 'Communities of Practice'.

The application of COP to Foreign Language Teaching should not be

only the theoretical background of 'Virtual Immersion'. As a conclusion, I suggest a Community of Practice that is having learners acquire language learning strategies through the learning a language, not learning a language through the use of the language.

Reference: Lave, J & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. New York: Cambridge University Press.

研究発表2 - 1 Read-and-Look-Up を用いた音読が高校生 の Listening 能力に与える効果

土居美由記(和歌山大・院 和歌山県立商業高校)

高校の英語教育現場では音読はもっとも用いられることの多い活動の一つであるが、その目的は曖昧な場合が多く、その効果もまだよく研究されていない。

Read-and-Look-Up は、学習者の個人のペースで取り組み、授業にも導入しやすい音読法である。学習者が、読んだ意味のまとまりを一度保持しながら英語の語順で意味を理解していく過程に、リスニングに必要とされる処理過程を含むと考えられる。しかし、Read-and-Look-Up のリスニング力への効果については実証されていない。

今回、「Read-and-Look-Up を用いた音読はリスニング能力を向上させる。」という仮説をもとに、高校1年生に Read-and-Look-Up を用いた音読の指導を行い、リスニング能力に与える効果を調査した。

本発表では、その結果を報告し、効果的な音読の指導のありかたについて考察したい。

【方法】公立高校1年生を対象とした6週間の比較実験を行う。実験群の授業 Listening Test のあと、Read-and-Look-Up を用いた音読練習を行う。音読指導は、発音・イントネーション・音変化・音読速度などに留意しながら、意味のまとまりごとに文章を理解することに重点を置いた。

統制群の授業 Listening Test のみで音読練習は行わない。

【結果】Listening の事後テストのt検定で有意差が見られた。

研究発表2 - 2 質的研究 - 英語の授業を変える Informational Learning : コミュニケーションを考慮した学習者中心の授業で内発的動機付けを高める考察

川部隆世(関西大・院)

1. はじめに

この質的研究は、大学1、3年生、中学3年生を対象とし新しい視点で授業を変える指導法を考察した。前回の研究の理論的枠組みであった、Deci & Ryan の「自己決定理論」と Williams & Burden の “a social interactionist model” を根底に 学習者中心の指導と Experiential learning (Kolb) を実践理論枠として考慮した結果、自発的な学習によって認知的発達を英語学習で経験した学生は、内発的動機が高められるという仮説をたて、それを質的研究で実証する試みである。

2. 研究方法

2004年4月から大学1年のクラス、7月から大学3年生のクラスでの授業見学と、担当教師、学生の recall interview を行い、そのデータを上記の理論枠組みで考察した。今回の研究では、学生の英語への態度、基礎学力が大きな影響を動機に与えることも明らかになった為、中学の英語授業も観察の考慮に入れ、2004年6月に英語のクラスの授業見学と学生、担当教師の recall interview を行った。

3. 結果

動機付けの低い英語学習者の増加をなげく昨今であるが、優れた授業実践に見られる学生との関わり方の中に、Informational Learning: 学生と教師間の communication や interaction, feedback を考慮した学習者中心の授業で学生の認知的発達を促し、内発的動機付けを高める指導法 (Kawabe, 2004) を確認することが出来た。文部科学省が唱える新教育課程では、「自ら学び考える力の育成」が掲げられているが、それを実証しているこの研究結果が EFL 学生の英語学習をその方向へ促進する手助けになり、授業実践の場で英語の授業を変えていくひとつの提案になる事が出来ることを願っている。

Referencs:

- Deci E L, & Ryan R M. (1985) Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum.
- Kolb, D. (1984) Experiential learning: Experience as the source of learning and development. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Williams, M, & Burden, R. L. (1997) Psychology for language teachers: a social constructivist approach. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森敏昭、秋田喜代美監訳、21世紀の認知心理学を創る会訳、「授業を変える－認知心理学のさらなる挑戦」(2002)。北大路書房

実践報告2 - 3 現在完了指導について一試案

森永弘司(立命館大・非)

日本の英語学習者にとって十全な理解が容易でない文法事項の一つ

として、現在完了を挙げることができる。中学や高校でかなりの時間を割いて指導がおこなわれているが、主として用法や訳し方の説明を中心に授業が展開されている。その際に生徒が戸惑うことの一つは、現在完了の形は have(has)+過去分詞という一つの形なのに、何故「完了」、「経験」、「継続」、「結果」の四つの用法があり、訳し分けなければならないのかということである。どう考えてもこの四つの用法に共通点を見出すことはできない。従って大半の生徒は現在完了の本質を理解することなく四つの用法を暗記し、個々の英文をその用法をもとに理解していくというプロセスをたどることになる。

そこで今回の発表では、現在完了の本質を理解させる方法として、管見では一番秀抜だと思う佐久間治氏が提案されている金太郎飴のイメージを利用させていただき、それに私なりの工夫を凝らした現在完了指導法とそれを用いて学生に指導したいの理解度の難易についてのアンケート調査の結果を報告する。

今までに習った現在完了指導法と私の現在完了指導方法を比較した場合、とてもわかりにくい 少しわかりにくい どちらともいえない 少しわかりやすい とてもわかりやすい の5段階のリッカート・スケールの記入と私の指導案の長所と短所に関してコメントを書いてもらった。結果は以下の通りである。この指導方法の長所と短所に関しては、当日発表する。

とてもわかりにくい	5名
少しわかりにくい	10名
どちらともいえない	35名
少しわかりやすい	83名
とてもわかりやすい	24名

参考文献: 「英語の不思議再発見」 佐久間治、筑摩書房、1996.

研究発表3 - 1 Second Language Reading Proficiency and First Language Orthographic Effects on Second Language Word Recognition

Akamatsu, Nobuhiko (Doshisha Univ.)

Focusing on the efficiency of processing the constituent letters, the study investigated the degree to which L1 orthographic features affect Japanese learners of English (JLEs) with differing L2 reading proficiency. The efficiency of processing the constituent letters was chosen as the target aspect of L2 word-recognition skills because previous studies often report that L2

readers with a non-phonological L1 orthography (e.g., Japanese, Chinese) experience a large impact of L1 effects in this particular aspect of word-recognition processes. The main research question of the study was whether an increase in L2 reading proficiency can reduce the degree of L1 orthographic effects on the efficiency of processing the constituent letters in an English word.

For the purpose of the study, case alternation (mixing lowercase and uppercase letters in an alternating way) was considered to be suitable because the unfamiliar appearance of case-alternating words forces one to pay attention to sequences of individual constituent letters (Paap *et al.*, 1984). It has been reported that skilled readers' recognition of familiar words is not dependent upon word-shape information; skilled readers are not affected by such visual distortion of words as case manipulation (e.g., Adams, 1979).

Two groups of JLEs (more and less proficient readers of ESL) were asked to name lowercase and alternating-case English words with varying frequency and spelling regularity. Reaction time and response-accuracy scores were collected. The analysis used a 2 x 2 x 2 x 2 factorial design, with reading proficiency in English (more proficient and less proficient), stimulus case-type (lower and alternating case), stimulus frequency-type (high and low frequency) and stimulus regularity-type (regular and exception words) as factors.

Results underscored the robustness of the main effects for four variables: word frequency, word regularity, case type and L2 reading proficiency in both reaction time and response accuracy. As expected, high-frequency words were recognized more quickly and more accurately than low-frequency words; regular words were processed more quickly and more accurately than exception words. Furthermore, lowercase words were named more quickly and more accurately than alternating-case words; more proficient L2 readers recognized English words more quickly and more accurately than less proficient L2 readers.

An important finding of this study was that there was no statistically significant interaction between reading proficiency and case type in either word-recognition time or accuracy. Regardless of differences in L2 reading proficiency, case alternation adversely affected the L2 word-recognition

performance (word-recognition speed and accuracy) of JLEs to the same degree. This suggests that L2 processing experience produces little difference in the efficiency of processing the constituent letters in an English word for L2 readers with a non-phonological L1 orthography, thereby underlining the impact of L1 orthographic effects on L2 word-recognition processes.

References:

- Adams, M. (1979) Models of word recognition. *Cognitive Psychology* 11, 133-176.
- Paap, K., Newsome, S. and Noel, R. (1984) Word shape's in poor shape for the race to the lexicon. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance* 10, 413-428.

研究発表3 - 2 外国語教育のための誤り知識記述: 学習者コーパスの共用環境の構築をめざして

谷村 緑(近畿大・非)

竹内和広(情報通信研究機構)

井佐原 均(情報通信研究機構)

エラータグ付き学習者コーパスは、学習者の誤り事例をデータ化しようとする試みである。一般に、これらは、誤り箇所を指摘すること、誤り箇所を修正すること、当該箇所を誤りとみなした理由を記述すること、の3つ組により構成される。は例えば、「時制の不一致」、「pay の過去形は payed ではない」といった を に直した理由の注釈である。このような注釈の基本は自然言語で記述することであるが、集計や誤り判断が煩雑になるため、誤りのタイプ分類を整理してコーパスを作成することが一般的である。

ある学習者の誤りを指定する際、上記の が教員によって異なる可能性があることは容易に指摘できる。なぜなら教員は、学習者の学習到達レベル、母語の干渉、話し言葉と書き言葉の相違、といった諸要素を考慮しつつ誤りを指摘するのであり、誤り指摘の観点は、同じ教員であっても時と場合、学習者によって異なることが本質だからである。しかし、エラータグ付きコーパスの作成においては、データの一貫性の観点から、個々のコーパス作成目的により、これらの観点の相違を捨象せざるを得ない。このことは、学習者コーパスの共有化や再利用の点で問題となる。

題名に示した「Error Ontology」とは、誤りに関する知識記述を目指したデータベースの呼称であり、造語である。なお、Ontology は、インター

ネットのホームページに記述された知識をメタデータ化し共用・再利用しようとする試み - Semantic Web - の中心的な要素である。本発表では、インターネット上において教員が互いに作成仕様の異なる学習者コーパスを、共用・再利用するための方法について議論する。具体的には、Semantic Web 研究で提案されたツールを援用し、日本人英語学習者の発話データを書き起こした SST コーパス(Tono et al. 2001)を例に、(1)コーパスごとに異なるエラータグをどうするか、(2)定量的分析をどう精緻化していくか、(3)教育現場へどのように還元するか、の3点から検討したい。

Reference:

Yukio Tono et al. (2001) The Standard Speaking Test (SST) Corpus: A 1 million-word spoken corpus of Japanese Learners of English and its implications for L2 lexicography. *SST Technical Report Collection*.

研究発表3 - 3 Characteristics, Word Levels, and Authenticity Verification of the TOEFL vocabulary

Mizumoto, Atsushi (Graduate School, Ritsumeikan Univ.)

Tsumatori, Chizuko (Graduate School, Birmingham Univ.)

TOEFL is now widely used as a test for assessing overall proficiency of English. Chujo and Nishigaki (2003) reported that there is a large gap between English for General Purposes (EGP) and English for Academic Purposes (EAP), namely TOEFL. The reason why Japanese test takers have difficulty getting high scores on TOEFL can be explained by their insufficient amount of vocabulary. While their results were insightful, however, what types of vocabulary are more likely to appear in TOEFL compared with other English texts and how authentic it is from the view point of EAP were not fully discussed in Chujo and Nishigaki's research. In this study, we investigated the characteristics, word levels, and authenticity of the TOEFL vocabulary by means of comparing the word list obtained from the TOEFL corpus with other word lists and corpora.

First, the TOEFL corpus was created from several TOEFL preparation materials, and the total token resulted in more than one million words. Next, with the aim of a comparison, a corpus consisting of academic texts was prepared. The Academic corpus prepared for this study includes BROWN, LOB, FROWN, FLOB, and Wellington corpus' academic-related segments.

Respective word lists for these corpora, the TOEFL corpus and the academic corpus, were retrieved and then lemmatized with the help of a computer program.

In order to examine the characteristics of the TOEFL vocabulary, the British National Corpus high frequency list (Kilgariff, 1996) was employed, and a statistical analysis, log-likelihood, was carried out to compare the frequencies. Word level analysis was conducted mainly referring to JACET8000. Academic Word List (Coxhead, 2000) was included as part of authenticity verification since TOEFL is commonly believed that it is an EAP test and its validity has been well-proven.

The results of this study revealed that 1) so-called TOEFL vocabulary peculiar to TOEFL does exist, 2) word levels are not so different from other general English texts, and 3) TOEFL is highly authentic in terms of vocabulary and can be concluded that it is EAP. The characteristics and word levels will be further discussed at the presentation with more concrete examples.

References:

Chujo, K., & Nishigaki, C.(2003). Bridging the Vocabulary Gap: from EGP to EAP. *JACET Bulletin*, 37: 73-84
Coxhead, A. (2000). A New Academic Word List. *TESOL Quarterly*, 34(2): 213-238.
Kilgariff,A.(1996). *BNC database and word frequency lists*.
<http://www.itri.bton.ac.uk/~Adam.Kilgariff/bnc-readme.html>
The Japan Association of English Teachers.(2003). *JACET List of 8000 basic words*. Tokyo:JACET.

研究発表4 - 1 日・英小説における感情表現の違い

伊原紀子(神戸市外国語大・非)

英語小説を和訳する際、文字通り直訳すると情感に欠け、物足りなさを感じると指摘されることがある。本発表では、この指摘に理論的根拠があるかどうか、またあるとすれば、物足りなさの原因はどこにあるのかを探る。

日本語には、終助詞「よ、わ、ね」や丁寧体を表す助動詞「です、ます」など、発話の命題内容にかかわらず、話し手が発話のコンテキストをどのように捉えているか、つまり話し手が相手に対してどのような感情的関わり方をしているかを示す表現がある。Maynard(1993)はこのような表現をディスコース・モダリティ(DM)という概念でとらえることを提唱してい

る。DM は談話構造や実際の社会的相互作用と関連する広義のモダリティである。

英語にも対人関係を表す表現として、呼びかけ語、付加疑問文、you know, right 等の付加表現、I mean, I think,のような発話の性格付け(ためらいや強調等)の表現がある。これらの表現は指示的な情報よりも、話者の気分や情感、気質とともに、相手や状況に応じた発話態度を伝えるものである。

本発表では同等の機能を持つと思われる日・英の DM 標識に注目し、数編の小説の対照分析を行なうことによって、感情表現の現れ方に差異があることを明確にした上で、その原因を言語学的に考察する。その結果、日本語は DM 標識が付き易く、小説の地の文において、語り手の主観的語りかけや、登場人物への視点移行によって直接話法形式が現れやすいことが分かった。一方英語の小説では、Biber & Finegan(1989)の調査結果からも裏付けられるように、DM 標識が少ない。つまり日本語の小説の方が感情的態度を示す DM 表現が英語より多いという一般的傾向が、言語上の特質から導き出せる。従って翻訳の際は DM 表現を調整しながら訳出する必要がある。これによって得られた知見は、英文解釈やオラル・コミュニケーションの指導にも有益である。

参考文献

- Maynard, K. S. (1993). *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Biber, D. and E. Finegan. (1989). Styles of stance in English: lexical and grammatical marking of evidentiality and affect. *Text*, 9,1: 93-124.

研究発表4 - 2 句動詞の意味成立の考察—make up を中心に 青木真喜子(在宅翻訳)

日本人英語学習者にとって multi-word verbs (phrasal verb, prepositional verb & phrasal-prepositional verbs) の習得は難題である。統語現象の複雑さに加えて、その結合体の意味がパーツの意味の総計からは予測不可能な場合が多く、多義性を生む。本発表では動詞と不変化詞の意味的な結合に注目し multi-word verb の中から phrasal verb の make up を選び、その結合体の意味成立の分析を行う。複雑な統語現象も語と語の意味的チャックによるものと筆者は観察(Aoki 2001)するが、ここでは詳述しない。意味の問題に焦点を絞るためである。

われわれ人間は経験を土台にして事態を認知する。up は人間の身体

的特徴から出た垂直概念のシンボリック化であり、それは shoot up などの emergence (出現・創発) から始まり、completion (完了) を意味する eat up に加えて throw up one's food などの極限状態が up にシンボリック化されているのを観察する。Lindner (1983)によれば up の意味の中心は increment(増加)だという。一方、事態変化は動詞 make にコード化されている。小西(1980)によれば「make は本来他動詞であり、「物事などを別の形状状態にする」を基本的意味とし、多義語の代表的なものの一つ」という。こうした観察をもって、本発表では、複合語としての句動詞 make up を中心にその意味の成立を考える。つまり、make up の場合、動詞 make の意味構成要素と不変化詞 up の意味構成要素がそれぞれの情報を保持しながら合体し、文脈に応じて「道路補修」や「再履修」などの多義的な意味が実現するのではないかと考察する。本発表はその検証である。

参考文献:

- Lindner, Susan J. (1983) "A Lexico-Semantic Analysis of English Verb Particle Construction with OUT and UP." Doctoral Dissertation, reproduced by Indiana Univ. Linguistic Club. 他

研究発表4 - 3 A comparative study of the two prepositions in Chinese and English -- 和(hé) and WITH

Yang, Demin (Graduate School, Kobe City Univ. of Foreign Studies)

Chinese learners of English as well as English learners of Chinese tend to admit such an inference: since Chinese 和(pre.) and English with (prep.) share the comitative meaning, the two words should be equivalent. However, things are not so simple. Along the diachronic and synchronic axes, studies are carried on in this paper. Diachronic study of Chinese preposition 和 is mainly operated along the line of grammaticalization. Starting from a typical verb in Archaic Chinese, 和, through the change of grammaticalization, becomes a functional lexeme in Present-Day Chinese -- a preposition with its core meaning the comitative sense. Major mechanisms involved in the change of this word are pragmatic inferencing and reanalysis. Originally the English preposition WITH is a preposition in Old English, so its change does not seem to be a typical case of grammaticalization (or even not to be seen as a grammaticalization change) according to the definition of grammaticalization. But this word does and indeed has its own history of change. Borrowing the

view point of Rhee (2003), the development of this word can be summarized by such mechanisms as subjectification and frame-of-focus variation. Synchronic studies consist of the syntactic and semantic comparisons and contrasts between the two ones in present Chinese and English languages. The results show that 和 and WITH do not differ so much in syntactic aspect but not in semantics. WITH keeps more semantic meaning than its Chinese counterpart. The differences can be accounted for by the distinct features of the two languages: one is inflectional and the other is isolating, in nature.

Major references:

- Dirven, R. 1993. *Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions*. in *The Semantics of Prepositions, From Mental Processing to Natural Language Processing*. ed. Comelia Zelinsky-Wibbelt. Berlin: Walter de Gruyter & Co.
- Hopper, P.J. & Traugott, E.C. 1993, 2003. *Grammaticalization*. Cambridge: CUP.
- Oxford English Dictionary*.
- 陈昌来. 2002. «介词与介引功能». 合肥: 安徽教育出版社.
- 《现代汉语词典》(修订本). 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编. 1997. 北京: 商务印书馆.
- 秋元 実治. 2002. 「文法化とイディオム化」東京. ひつじ書房

研究発表4 - 4 談話における日英語の否定疑問文

香月真由美(関西学院大・院)

日本語における否定疑問文に関して、井上(1992)は「ない」が質問文に含まれるかどうかによって、2種類の否定疑問文に分かれ、含まれる場合は傾きを持たない純粹否定疑問文、含まれない場合は傾きを持つ誘導否定疑問文としている。これらの名称は人によって異なるが、傾きを持つ、持たないの2種類があるということでは同意見である。

一方、英語の否定疑問文に関して Quirk *et al.* (1985)は次のように述べている。否定疑問文は常に誘導的であり、“Don't you believe me?” の文は否定的傾きを持ち、その場合は驚きや失望を表わすことが多い。“Didn't someone call last night?” では someone と共起していることから肯定的傾きを持つとされている。また、Bublitz(1981)によると否定疑問文が中立的で傾きを持たないのはまれである。

先行研究を見る限りでは、どちらの言語でも否定疑問文には、傾きがある場合とない場合があることは共通点と言える。しかし、どのような文脈において肯定疑問文ではなく、否定疑問文が用いられるのか、また、その文脈について日本語と英語で同じであるかどうかについての言及

はされていない。本研究では日本語の小説と英語訳版を比較し、否定疑問文における日本語と英語の対応関係を見る。3つの小説で比較した結果、日本語の否定疑問文について英語の否定疑問文が対応していたのは約4割である。日本語と英語では否定疑問文が用いられる文脈に違いがあることが予想できる。これらの文脈の分析から談話における日本語と英語の否定疑問文について共通点、相違点を探ってみたい。

参考文献

- Bublitz, W. 1981. 'Conducive yes-no questions in English'. *Linguistics* 19. 851-870
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 井上優 1992. 否定疑問文に対する「有標の応答」『日本語学』4-2, 125-131

シンポジウム「特色ある大学英語教育に向けての実践と課題」

司会: 豊田昌倫 (関西外国語大)

パネリスト: 智原哲朗 (大阪女学院大)

Lucy Cooker (神田外語大)

江平英一 (関西外国語短大)

大学英語教育学会(JACET)関西支部 2004 年度秋季大会では、「特色ある大学英語教育に向けての実践と課題」と題してシンポジウムを開催することになりました。近年授業研究を始めFD活動の重要性はますますその重要性が認識される中、JACET の理事会では此の春に「授業学研究委員会」が設置されることが決定いたしました。今回はこのような状況のなか、当学会では多くの方が御関心を持たれ日頃懸命に取り組んでおられるこの問題につきまして、特に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に COL として選定された大学・短期大学関係者をパネリストに招き、それぞれのプログラムと取り組むの説明及び今後の課題等を中心に報告と議論を行います。今回は長年にわたり優れた教育実績を積み重ねてきたこれらの大学のプログラムを紹介するだけでなく、時間を十分に取って、フロアーからの質疑を交えてFD活動全般について深く掘り下げて検討する予定でありますのでどうか御期待いただき、是非多くの皆さまに御参加戴きますようお願い申し上げます。